

那珂川の豊かな水産資源に大きなダメージを与える霞ヶ浦導水事業

栃木・茨城県を流れる那珂川はアユの漁獲高日本一を誇り、最下流で合流する涸沼川はシジミの三大産地の一つです。この豊かな水産資源を育む那珂川のみならず、霞ヶ浦、利根川にも大きなダメージを与える霞ヶ浦導水事業が進められています。

那珂川の漁業を守らなければならないと、那珂川水系の8漁協が導水事業差止めの裁判を2006年3月に提起して、今年12月19日に結審となり、**判決は2015年7月17日です。**

(那珂川水系の8漁業協同組合：茨城県の那珂川漁協・那珂川第一漁協・緒川漁協・大涸沼漁協、栃木県の那珂川北部漁協・那珂川南部漁協・茂木町漁協・那珂川中央漁協)

漁協が提訴した主な理由

① 漁獲高日本一を誇るアユへの影響

那珂川に霞ヶ浦導水の取水口が建設されることによる最大の懸念は、アユの仔魚（しぎよ）の吸い込み問題です（仔魚：卵から孵化したばかりの稚魚の前段階の幼生）。

仔魚は自力では遊泳することができません。孵化した後は、流れに乗って、餌の豊富な河口域に到達し、そこでようやく餌を食べます。仔魚が河口域に到達するまでの間は、腹部に蓄えている卵黄を消費しながら生存するのですが、卵黄は4日分しかありません。その期間内に河口域に到達しないと、仔魚は餓死することになります。

導水事業は、最大で毎秒15 m³の水を那珂川の取水口から取水する計画ですから、自力では遊泳できない仔魚が取水口から吸い込まれたり、取水口付近で滞留して餓死する可能性が十分にあります。

② 三大産地の一つである涸沼シジミへの影響

那珂川は下流で涸沼川によって涸沼につながっています。涸沼川でヤマトシジミの生産が卓越するのは潮汐によって那珂川の河川水が逆流して適度な塩分が保たれるとともに、涸沼内で生産された有機物が下流のヤマトシジミの漁場に運ばれていることにあります。導水事業による那珂川からの大量取水はこのバランスを崩し、ヤマトシジミの生産に大きな影響を与えると予想されます。

③ 外来生物が侵入する危険性

那珂川は、利根川水系の霞ヶ浦とは水系が違います。導水事業によって異なる水系間を生物が移動することによって起きる変化が危惧されます。とりわけ心配されるのは、特定外来生物カワヒバリガイなどの外来生物の分布拡大です。外来生物は漁業や農業、生態系に被害を及ぼします。固有の性質を持つ生物が失われたり、新たな生物が持ち込まれたりして問題が明らかになってからでは取り返しがつかないこととなります。

④ 霞ヶ浦導水事業の三つの目的は虚構

導水事業の目的は、①新規利水の開発、②流水の正常な機能の維持（利根川と那珂川の濁水時の補給）、③霞ヶ浦等の水質浄化の三つです。しかし、①、②は必要性が乏しく、③は導水による水質改善効果を期待できません。

霞ヶ浦導水事業は、巨額の公費を浪費し、那珂川等の自然に大きなダメージを与えるだけの事業になっています。